

2021年度 関西学院大学 海外客員教員(招聘A) 成果報告書

(適宜行追加可)

受入担当 教員	所属・職	人間福祉学部・教授
	氏名	池埜 聡
海外客員 教員	所属・職	School of Social Work in Carlton University, Associate Professor
	氏名	朝倉 健太 (Kenta Asakura, Ph.D.)
招聘目的	1. 授業担当及び研究 2. 共同研究 3. 特別枠 (いずれかに○)	
招聘期間	2021年 9月 20日 ~ 2022年 1月 19日	
成果報告 以下の内容を記載して 下さい。	<p>1. 授業担当及び研究</p> <p>(1) 授業科目名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 性格発達論 (人間福祉学部社会福祉学科) ・ ソーシャルワーク実践研究 (人間福祉研究科) <p>(2) 授業担当の成果</p> <p>性格発達論 : 160名近くが履修し、授業目的を達成することができた。COVID-19の影響でオンライン開講となり、教室サイズ問題により対面授業が再開されてからも引き続きオンライン状態が続いた。Interpersonal Neurobiologyの枠組みを軸に幼児期から児童期における愛着形成が人生全体に波及していくメカニズムと青年期、中年期、老年期におけるパーソナリティ変容の実際について理論とソーシャルワーク実践の視点から授業を展開した。Dr. Asakuraは、10年以上にわたる臨床ソーシャルワークの実践経験をフルに活用され、愛着の剥奪による内的ワーキングモデルへの影響、性的マイノリティ独自の性格発達プロセス、そして成人後のトラウマ耐性への愛着の影響などを紐解いてくれた。また、北米スタイルの双方向型オンライン授業は学生たちの関心を集めた。</p> <p>ソーシャルワーク実践研究 : 3名の博士課程前期課程の大学院生が履修した。北米の臨床ソーシャルワークをベースに、特にtrauma-informedの視点からソーシャルワーク実践モデルの利点と限界、さらに最新のトラウマ臨床のモデルを紹介してくれた。カナダ先住民族の歴史的トラウマとソーシャルワーカーがそのトラウマに加担してしまった現実、アメリカにおける差別、偏見、抑圧などシステムック・トラウマの読み解き、そして2001年のニューヨーク同時多発テロ(911)を発端にして概念化された共有トラウマ(shared trauma)について、豊富な実践経験をもとに臨床方法を提示されるなど、日本では十分に議論できていない問題について触れていただいた。院生の評価は非常に高く、修士論文のリサーチ・クエスチョン構築に向けても多大なサポートをいただいた。</p> <p>(3) 研究内容</p> <p>文化差を考慮したシミュレーション・プラクティス・モデルの開発研究。 Dr. Asakuraが継続して行っているトロント大学のDr. Marion Bogolによるソーシャルワーカーのホリスティック・コンピテンスを向上させる教育プログラム、</p>	

<p style="text-align: center;">成果報告</p> <p>以下の内容を記載して下さい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業担当及び研究 <ol style="list-style-type: none"> (1) 授業科目名 (2) 授業担当の成果 (3) 研究の内容 (4) 研究の成果 2. 共同研究 <ol style="list-style-type: none"> (1) 共同研究の内容 (2) 共同研究の成果 3. 特別枠 <ol style="list-style-type: none"> (1) 活動内容 (2) 成果の成果 	<p>シミュレーション・プラクティス・モデルを日本人向けに開発するための方法論的研究。</p> <p>(4) 研究成果</p> <p>Dr. Asakuraが現在推進中のシミュレーション・プラクティス・モデルにもとづく文化的差異を念頭においた実践研究は、その先行研究の共有と実際の研究手法について継続的な情報交換を行った。当初は対面でのシミュレーションによる実験研究を計画していたが、オンラインによるものしか実施ができないことになり、日本人のコミュニケーションスタイルに合わせたシミュレーション・プラクティスの理論研究が中心となった。またオンラインによる実践も北米ではすでに行われており、Dr. Asakuraの経験も踏まえ、今後の社会福祉学科及び人間福祉研究科におけるオンライン・ベースの実習方法に向けたシミュレーション活用方法についても検討を行い、その可能性を探索することができた。今後、本理論研究の成果を論文として発表していくことを考えている。</p>
--	---